様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１２７９８

研究課題名（和文）被災地の復興に寄与するユニバーサルツーリズムの開発と実践

研究課題名（英文）The development and action of universal tourism in the restoration of disaster areas

研究代表者
石塚　裕子（ISHIZUKA, YUKO）

大阪大学・工学研究科　・特任助教（常勤）

研究者番号：８０７５０４４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：全国の先進事例調査ならびに福島県いわき市において多様な主体で構成される検討会を設置し、モデルツアーを３回実施した。その結果、ユニバーサルツーリズムを推進していくには、社会的意義の再確認、戦略的機会の確保、多様な当事者ニーズの発掘、そしてまちづくり活動としての展開の４つの要素が必要であることが明らかになった。また、さまざまな当事者ニーズに応えるプロセスは、多様な主体を有機的に連携させる力を有し、社会的ネットワークを構築することが明らかになった。今後の課題は、健常者ニーズで構築されたコンテンツを、当事者基準による新たな楽しみ方、学び方を発信することと、その共有方法の開発である。

研究成果の概要（英文）：We set up a study group consisting of diverse subjects in Iwaki City, Fukushima Prefecture and in advanced case studies in Japan, and carried out model tours three times.
What was discovered is that four elements are necessary to promote universal tourism, which are the reaffirmation of social significance, the securing of strategic opportunities, divining the needs of the disability person, and regional development activities. In addition, it has become clear that the process of responding to various disability person's needs has the power to organically link diverse entities, and to construct social networks. The task ahead is to disseminate new ways of enjoying and learning about content based on the needs of healthy individuals under the concerned disability person's standards, and to develop methods for sharing it.

研究分野：都市および地方計画

キーワード：ユニバーサルデザイン　ツーリズム　インクルーシブ　観光　バリアフリー　災害復興　災厄伝承　障害者

１．研究開始当初の背景

東日本大震災から３年７ヶ月が過ぎ、被災地への国民の関心が低下してきている。そのような中、被災地ツーリズムは、非被災者が被災地に関心を持ち、復興を共に考えるツールとなると考える。研究代表者は、災害の記憶の痕跡又は展示を五感で体得する機会が、解釈されていない災害の記憶を分有することの一助になると考え事例研究を行っていた（石塚,2013）。一方、観光のユニバーサルデザイン分野においては、移動や施設改善に関する研究蓄積があるものの、知識増進、自己拡大などの欲求を満たす観光コンテンツのユニバーサルデザイン化に関する調査研究は少ない。その中で研究代表者は手学問理論(広瀬,2008)を援用した触る街並み観光に関する効果検証を行い観光コンテンツのユニバーサルデザイン化の有用性を確認している(石塚、2011)。

ユニバーサルツーリズムの推進にあたっては、観光事業者だけでなく福祉、医療、交通、学芸員、ボランティアなど多様な主体の連携がなければ成立せず、受け入れ地域の社会的ネットワークが必要となり、新たな社会関係資本の構築を促し、これはまちづくりの観点から取り組みの効果の一つである考えた。そこで福島県いわき市をモデルケースに実践研究を行い、被災地の復興に寄与するユニバーサルツーリズムの推進方略と効果を明らかにするという着想を得て、本研究に着手した。

２．研究の目的

東日本大震災後に各地で展開されている被災地ツーリズムをユニバーサルの視点から再考するという萌芽的な着想をもとに、「五感を通じた災害の伝承」と、それを支える「社会的ネットワーク」の２視点からアプローチし、被災地におけるユニバーサルツーリズムの開発ならびに実践、効果検証を行うことを目的とした。具体的には、

1.災厄を伝えるツーリズムとユニバーサルツーリズムに関する事例調査を通じて課題を分析すること。

2.モデル地区においてユニバーサルツーリズムのプラットフォームをつくり、実施体制を構築すること。

3.「手学問」理論等を援用した五感を通じた災害の伝承方法を開発し、地元 NPO 等と協働してモデルツアーを実施し、その効果を検証すること。

である。

３．研究の方法

次の３種類の方法を用いて､研究を行った。

1．災厄を伝えるツーリズム、ユニバーサルツーリズムの事例調査

2．モデル地区での実施組織の立ち上げ及び。「手学問」理論等を援用した五感を通じた災害の伝承方法の開発。

3.地元 NPO 等と協働したモデルツアーの実施と、その効果の検証。

４．研究成果

以下の３点について成果を得た。

(1) 災厄を伝えるツーリズム、ユニバーサルツーリズムの課題

① 災厄を伝えるツーリズム

自然災害、人的災害（戦災、公害）に関するスタディツアーおよび博物館等を調査し課題を整理した。

・過去の災厄の記録の伝承施設では，大部分が視覚に頼った展示であった．災害を視覚のみで伝える場合，展示する側が解釈した内容のみを伝える展示となり、災害の記憶を体得するというよりは，災害の知識を学ぶ場となっていた．

・臭覚，触覚，聴覚を用いた展示は，展示者の解釈をともなわずに災害の記憶を分有できる可能性がある．非経験者が自身の感覚に直接刺激をうけることが可能であり、解釈されていない災害の記憶の分有の一助となる可能性がある．ただし，その刺激が災害の記憶の伝承となるかは検証が必要である．

・被災の現場は場の力で災害の記憶を伝えることが可能である。復興途中である東日本大震災の被災地では，現地の場の力が非経験者にも強いメッセージを発し，災害の記憶を分有することができる．一方で、復興を終えた災厄の地であっても、過去と現在が一つの土地、場所で結びついていることが重要である。災厄を伝承する博物館や資料館はどんな所でも立地できるわけではないことが示唆された。

② ユニバーサルツーリズム

全国各地に開設されているユニバーサルツーリズムセンター（又はバリアフリーツアーセンター）を訪問し、設立経緯や運営体制についてヒアリングを行った。最も早い段階から活動している神戸ユニバーサルツーリズムセンターを対象に、経緯分析を行った。その結果、ユニバーサルツーリズムの取り組みは地域に新たな社会的ネットワークを形成することが実証された（図１）。ユニバーサルツーリズムを展開するためには、「社会的意義の再確認」、「戦略的機会の提供」、「多様な当事者ニーズの発掘」、そしてまちづくり活動としての展開の４つの要素が必要であることが明らかになった（図２）。

(2)被災地の復興に寄与するユニバーサルツーリズム検討会による被災地いわきのツアー企画

福島県いわき市で障害者の在宅支援事業を行う認定 NPO 法人いわき自立生活センターを事務局に、いわきヘリテージツーリズム協議会、視覚障害者支援サークル縁、旅館古滝屋、JTB 東北いわき支店、いわき復興支援・観光案内所、いわき観光まちづくりビューロ

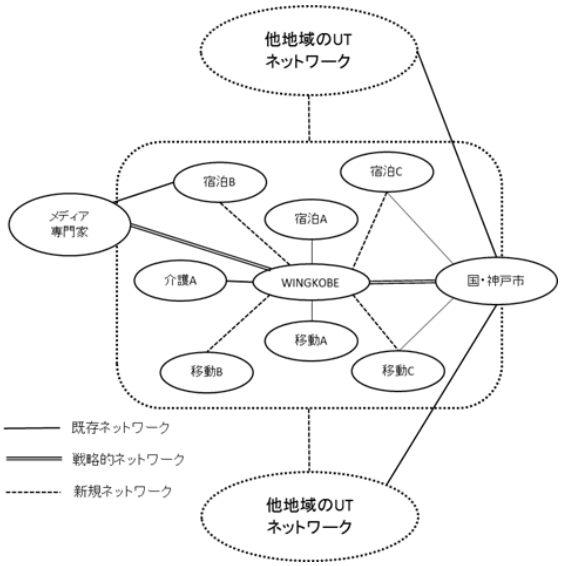

図１　ユニバーサルツーリズム活動で形成された社会的ネットワーク

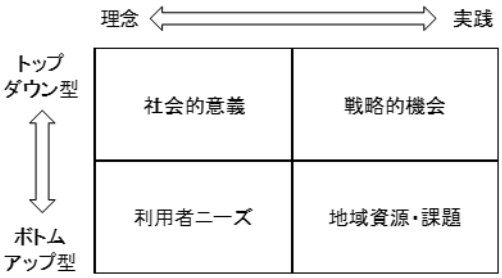

図２　ユニバーサルツーリズムを展開する要素

ー、国土交通省福島運輸局で構成される検討（図 3）を設立し、2016 年 4 月～2017 年 3 月の期間に計 6 回の会議を開催した。多様な主体による任意の会合の場では、自由闊達な意見交換が行われ、互いの信頼関係の醸成の場となった。後述するモデルツアーの実施以外にも相互に連携した活動が展開された。

図３　検討会の様子

(3)モデルツアー「いわきタイムトリップ」の実施、効果と課題

他地域の被災地ツーリズムの多くは、災厄の経験や教訓に終始するものが多く、コミュニティ・ツーリズムの定義である「コミュニティの人々自らがコミュニティの魅力を高めて、内外の交流を活発にする活動」いわゆるまちづくり活動への展開力が弱い。本研究では、いわき市の過去、現在、未来の時間軸に沿って、常磐炭鉱の史跡、湯本温泉郷、そして沿岸の津波被災地域、原発災害地域を 3 回のツアーでめぐる企画を立案した。

3 回のモデルツアーの概要は表 1 に示すとおりである。

効果としては、「触文化」を取り入れたツアーを企画したことにより、地域資源を伝える工夫として模型の作成(図 3)や資源価値の要点の再確認がなされたこと。

図３　手作りの模型を確認する参加者

表１　モデルツアー概要

	第１回	第２回	第３回
テーマ	いわきの「過去」 戦後を支えた常磐炭田の時代を体感する	いわきの「現在」 炭鉱と観光の共生そして震災 名湯　湯本温泉を体感する （UD温泉）	いわきの「未来」 震災を経た「これからのいわき」を体感する （スタディツアー）
協働者	いわきヘリテージツーリズム協議会	旅館　古滝屋 いわきヘリテージツーリズム協議会	JTB東北いわき支店 いわき復興支援・観光案内所
開催日	2016.11.20	2017.02.02	2017.03.18
ねらい	視覚的に見学できない人、炭鉱を知らない人にも理解しやすく、楽しめるツアーに取り組む	障がいの有無、種別を超えて楽しむ機会に取り組む 当事者、介助者と共に楽しむ 着地側の受け入れ体制をつくる	スタディツアーのユニバーサル化 障がいの有無、種別を超えた学びの機会
工夫ポイント	手作りの模型 山神社の相撲場ランチ	大浴場への入浴 炭鉱グッズの展示 関連団体の連携	リフト付きバスの利用 プロのツアー企画との協働
残された課題	車いすユーザーの方の移動	交流の時間の確保	障がい種別による相違 スタディツアーのUD化

また、単に史跡を紹介するだけでなく、かつて栄えた銀座通りを歩き、そこに生活する人々から話を聴くなど、新たな観光ツールをコミュニティの人々自らが発掘する機会になったことなどがあげられる。

また、2 回目、3 回目は視覚障害者だけでなく、肢体不自由者、言語不自由者も参加し、他組織のヘルパーにも応援を求めて実施した。その結果、ユニバーサルツーリズムを支える組織体制の拡充が図られたことはもちろんであるが、異なる障害者間同士の相互理解が深まるとともに、観光という非日常の行動が介助者と非介助者の関係性を対等化する効果も確認された(図 4)。

図 4　足湯・手湯を楽しむ様子

今後の課題としては、明らかにニーズが異なる車いす使用者と視覚障害者が共に学び、楽しむことができるコンテンツを発見することである。これは、異なるカテゴリーが互いの文化を相互理解しつつ、共有できる学びや楽しみを発掘するプロセスとなり、石川・倉本(2002)がいう「同化＆統合（平等派）」でもなく、「異化＆排除（差異派）」でもなく、「異化＆統合」をめざす道、共生の技法のプロトタイプ（図 5）となると考えられ今後の課題である。

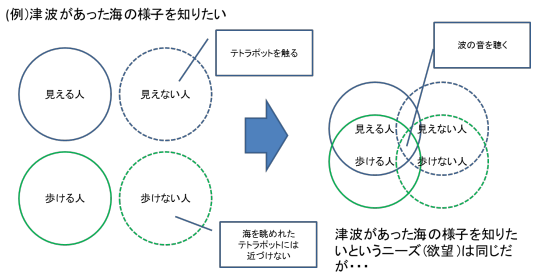

図 5　モデルツアーの課題例

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

石塚裕子,高橋冨美,新田保次,三星昭宏(2017)：ユニバーサルデザインのまちづくりにおける継続的な市民参加の効果に関する研究,土木学会土木計画学研究・D3 論文集 vol.72,No.5

石塚裕子(2017)：障害のある仲間達から「まちづくり」へのアプローチ,未来共生学 No5,大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムジャーナル

〔学会発表〕（計 2 件）

石塚裕子(2016):ユニバーサルツーリズムによる新たな社会的ネットワークの可能性,日本福祉のまちづくり学会第 19 回全国大会,函館市民会館　北海道[大会優秀賞受賞 2016.12]

石塚裕子(2017)：ユニバーサルツーリズムの定義の試論,日本福祉のまちづくり学会第 20 回全国大会,日本福祉大学,愛知

〔図書〕（計 1 件）

広瀬浩二郎編著,石塚裕子（分担）(2016)　ひとが優しい博物館　青弓社　(310 ページ)

〔その他〕

ホームページ等　ユニバーサル・ツーリズム「いわきタイムトリップ」DVD

6．研究組織

(1)研究代表者

石塚裕子（ISHIZUKA Yuko）大阪大学大学院工学研究科・特任助教

研究者番号：80750447

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

広瀬浩二郎（HIROSE Koghiro）国立民族学博物館・准教授

研究者番号：20342644

(4)研究協力者

なし